

# 日系アメリカ人のアイデンティティ変容

## — エスニシティ, ジェンダー, 国家を超えて —

黒木雅子

### はじめに

2015年, ミス・ユニバース日本代表に選ばれたのは, 日本人の母親とアフリカ系アメリカ人の父をもつ日本人女性である。その結果, いわゆる「ハーフ」が日本人代表になるのはふさわしくないという批判が, ソーシャルメディアで起こった。<sup>(1)</sup>そして海外メディアからは, そのような批判自体が差別的だとして非難が起こったのである。人種の「純粋性の神話」が問われるケースである。

この出来事は, 1953年からハワイのホノルル日系青年会議所によって行われてきた桜祭りの日系美人コンテストの応募資格をめぐる, 1990年代末の議論と規定修正を思い起こさせる。それは, 「日系アメリカ人とは誰のことか」「誰がコンテストに出ることができるのか」「日系アメリカ人らしさとは何か」, エスニシティとジェンダーの真正性をめぐる「日系アメリカ人の女性らしさとは何か」という問いである。応募者の人種, 文化, アイデンティティ, 真正性, 資格, ジェンダー規範など, 一筋縄ではいかない問題が表面化した。規定は, ハワイの日系人の約1/3が人種間結婚によるミック・レースであることを反映して, 50%の割合で日系人の祖先をもつ女性は応募資格があると修正がなされた(Yano 2006: 12)。

日本人であれ日系アメリカ人であれ, 均質で一括りにできる集団があるかのように論じることが難しくなっている。それは複数の人種や民族的背景をもつミックス・レースの人が増えたからだけではない。特に80年代以

降、人種だけでなく、エスニシティ、ジェンダー、階級、セクシュアリティなどにおける「内なるアウトサイダー(outsider within)」が可視化される機会が増えたからである。この「内なるアウトサイダー」とは、日系人女性のように、少なくともエスニシティとジェンダーという二つ(以上)の集団において「部外者」ではないが、フルインサイダーとしても扱われない、境界に位置するマイノリティを指す言葉である(Collins 1991: 11-3)。

複数の「違い」をもつにもかかわらず、一元的なマイノリティの捉えかたによって、内部の「違い」が社会的に不可視な複合的マイノリティ(multiple minority)は、日本でも少なくない。その結果、マイノリティのなかで二重、三重に差別を受けている複合的マイノリティが声をあげはじめ、「違い」の重層性、流動性、それらの交差と交渉が議論されるようになったのである。日系アメリカ人研究者のグレンは、これまでの人種と階級の理論だけではマイノリティ女性の生産労働(仕事)と再生産労働(家事、育児など)は説明できないとして、人種、階級、ジェンダーを交差させて(intersect)とらえる必要があると、論じた(Glenn 1985: 103-5)。つまり、彼女たちの経験は、男性中心的なエスニック運動や階級中心的な社会主義運動だけでは理解することはできないということである。また上野は、ジェンダーを分析概念として持ち込む意義について、「階級、人種、民族、国籍の差異を隠蔽するためではなく、さらなる差異——しかもあまりに自然化されていたために差異としてさえ認識されていなかった差異、いわば最終的かつ決定的な差異」を追加するためではなかったか、という問いを発している(上野 1998: 196)。

以上を踏まえて、本稿では、人種・エスニシティ、ジェンダー、階級などの「違い」の排除によって、均質な「日系アメリカ人」がどのようにつくられアイデンティティが変容してきたか、カリフォルニアの日系アメリカ人を考察する<sup>(2)</sup>。

## 出稼ぎから定住へ

近代日本は一貫して人口増加してきたが、19世紀末から20世紀前半の海外移民は、世界的な労働力市場と農村における過剰人口が結びついたものである。奴隷制廃止に向かうなか安価な労働力として、ハワイのサトウキビ農園や米国大陸横断鉄道工事、ブラジルのコーヒー農園などで需要があったのである。蘭は、日本における人口爆発による人々の移動を、1) 農村から都市部へ、2) 内国植民地の北海道開拓移住、3) 植民地やいわゆる外地へ、4) 北米、南米、アジアへ、と四つに分けて分析を行っている(蘭 2013: 2)。

本稿が考察する日系アメリカ人とは、蘭による分類の第4の移動にあたり、明治期に立身出世をめざしてアメリカに渡航し、結果的に定住した人たちとその子孫である。1890年代のアジア太平洋地域は、国際的な植民地争いが激化し、集団移住によって外国の土地を支配するという移民論が盛んになった時期である。日本人の集団渡航によって、ハワイ、アメリカ合衆国、カナダ西海岸、中南米の内陸地に勢力をのばすという東方への膨張主義の考え方もその一つである(東 2014: 48)。当時、日本の国力を三方面に拡張する議論として「東進論」「北進論」「南進論」があった(東 2014:<sup>(3)</sup>47)。しかし、移民一世が北米に渡った時の西部は、1882年の中国人排斥法成立によって、すでに白人支配者階級と安価な労働力であるアジア出身者との人種の序列はできあがっていた。

初期の移民はほとんどが独身の男性で、必ずしも永住を目的として渡米した人たちではなかった。1896年に日本政府が制定した移民保護法における移民とは、労働従事を目的に外国に渡航する人とその家族と定義されており、移住というよりも出稼ぎを意味していた。なかには徴兵を逃れるためという渡航理由もあったようだ。つまり、移住者だけでなく日本政府も永住を予見していなかったのである(イチオカ 1992: 4)。

日本人移民は、法的にはアメリカ市民権が取得できない「帰化不能外国人」として位置づけられた。帰化法で規定されている「自由な白人およびアフリカ人とその子孫」に該当しないからである。そのため、土地所有の禁止などの差別的待遇のなかで経済的基盤をもつために、「出稼ぎ」志向を捨て、いわゆる写真花嫁として日本から配偶者の呼び寄せを行った。渡航するための経済的余裕がなく、また日本で徴兵される恐れから、日本に帰ることのできる男性は限られていた。この慣行は、日本からの新たな移民が禁止され在米移民の家族だけに入国を許可する1907～1908年の日米紳士協定によって、1920年まで続いた。ちなみに1920年の時点で、日本への渡航も配偶者呼びよせもできなかった約24,000人の一世男性が独身のまま残されたという(イチオカ 1992: 195)。こうして、移民社会は女性の参入によって出稼ぎ志向から定住へと移行し、家族とコミュニティの形成が可能となったのである。

### 不均質な移民一世を結びつけたもの

初期の移民一世は、裕福な起業家から出稼ぎ労働者、学識ある都会人から地方の農民など、均質ではない職業や階級を含み、民族としての連帯感や共通のアイデンティティはなかった(東 2014: 30)。このように多様な集団にもかかわらず、日本の国家主義とアメリカの人種主義は彼・彼女たちを一括りにして扱った。たとえば一世たちは、異なる階級によって異なるかたちで日本の意味を捉えていたにもかかわらず、日本政府は帝国臣民の理想像に当てはめようとしたのである(東 2014: 29)。

一方、アメリカ社会で一世たちは、職業や階級の違いにもかかわらず、一律に「帰化不能外国人」として1952年まで市民権が獲得できなかった。多様な一世を結びつけたのは、アメリカにおける人種主義であり、「日本人は文化的に順応すれば名誉白人になりえるという近代主義者の信念」だった(東 2014: 113)。1900年頃から始まった排日運動という外圧は、日本人

移民を団結させることになった(イチオカ 1992: 176)。雑多な人々からなる移民をまとめる役割を果たした政治的組織の一つが、1908年にできた在米日本人会であり、サンフランシスコ領事館のもとで移民指導層によって組織された。これまで領事館が行っていた正式な証明書発行などの権限の行使を行い、日本政府の管理や司令、計画などを一世社会に伝えるネットワークと社会統制の役割を果たしたと考えられる。トーピーは、「国民の共同体という理念が、実際に実現されるには、単に『想像される』だけではなく、書類として成文化される必要がある」として、パスポートの発明とその役割を論じた(トーピー 2008: 10)。トーピーの主張を援用すれば、全米日本人会が発行する証明書という書類とその申請手続きは、それまで均質でなかった一世たちに、日本帝国臣民という共同体の理念に現実的意味を与える役割を果たしたと考えられる。

さらに、在米日本人会は、道徳改革指針として公的にアメリカ中産階級への「文化的同化」を優先するようになった(東 2014: 92)。外面的には服装や住まいなど生活環境から、内面的には文明化され自立した個人を目指したのである。たとえば、男性に従属させられているというマイナスイメージを避けるために、妻は夫の後についていくのではなく、並んで歩く習慣が奨励された(イチオカ 1992: 207)。ただし白人が想定する同化やアメリカ化とは異なり、一世はアメリカと日本の「二重の国民化」を考えていた(東 2014: 92)。

帰化が拒まれた一世は日本の国民でありながらアメリカ住民という二重のポジションを維持して生きていかざるを得なかった。しかしその後、強まる白人人種差別主義は一世としての集団的結束を強める一方で、「アイデンティティとコミュニティを祖国日本から引き離」していったのである(東 2014: 153)。

## 移民史が語らない女性の経験

言うまでもなく、人種差別に抗する日系アメリカ人移民史という「大きな物語」には、階級やジェンダーによって異なる経験をとらえる視点はない。筆者が1992年にサンフランシスコ近郊で二世～四世を対象に行った調査では、エスニシティ、ジェンダー、宗教が交錯するところで、それらもたらす葛藤だけでなく、思考と洞察を積極的に使って交渉する様子がみられた(黒木 1999, 川橋 黒木 2004, 黒木 2007)。

女性の経験の可視化や見直しが始まったのは、1970年代以降である。その一つが、1970年代に日系をはじめアジア系女性によって書かれたものを集めた『波を起こす(Making Waves)』というアンソロジーである(Asian Women United of California 1989)。そこに見られるアジア系女性のサバイバルの方法は、家事使用人として床を磨くことから畑でいちごを積むことまで、また怒りや寂しさを飲み込むことから自己肯定まで、と複数である。1920～1940年の間で、日系女性の職種で多いのが、農業、メイド、ウェイトレス、下宿や散髪屋(多くが日系人経営者)の従業員である。これらは、言語や人種差別が就職の障害となる日系女性に残された数少ない職種であり、白人との競争の少ない周辺労働だった。

男性中心の政治運動では、このような労働現場や家庭での個人的な主体の抵抗は見過ごされるか、取るに足りないものとされるがちだが、彼女たちのサバイバルそのものが抵抗と言えるのではないだろうか(Mazumdar 1989: 20)。1960年代後半の第二波フェミニズム運動のスローガン「個人的なことは政治的である」のように、「個人的なこと」と「政治なこと」を分けること自体がサバイバルの障害になる。ただし、このアンソロジーにはフェミニズムの影響は指摘できるが、白人中産階級のフェミニズムとは一線を画している(チャウ 1991)。

なぜなら、白人中産階級フェミニズムの当時の争点の一つが性別役割分

担(男は仕事、女は家庭)の克服だが、マイノリティ女性にそのような「優雅」な分担はない。このような白人バイアスに無自覚なフェミニズムへの批判として、筆者が調査したある二世女性は、これまで人種問題にコミットしてきたので、「フェミニズムは贅沢だ」と語っている(黒木 1999: 67)。日系一世女性は「良妻」「賢母」に加えて労働者という第三の役割を果たすことが不可欠だったからである(イチオカ 1992: 188)。それでも一世女性の経済活動は、家庭内で自立した立場を保ち、選択肢を増やすと同時に、男性と同じように、またはそれ以上に働いてきたことで誇りや強さにつながった。

### 移民史のなかの忠誠とは

一世の子どもである二世は、出生地主義をとるアメリカで生まれたのでアメリカ国籍をもつが、同時に血統主義によって日本人の父親をもつ人は自動的に日本国籍が与えられた。日系移民社会にとって、二重国籍をもつ二世をアメリカ人として育てるのかどうか、二世教育は大きな問題だった(イチオカ 2013)。しかし、1941年の真珠湾攻撃は、日系アメリカ人社会を一変させた。それまで日本人移民が日本帝国臣民であることとアメリカ化との間でとってきたバランスや折衷主義が、許されなくなったのである。

真珠湾攻撃の翌年、大統領命令により太平洋沿岸とアリゾナ州の一部に住む12万人以上の日系アメリカ人は中西部の10箇所の強制収容所に送られ、差別的待遇は頂点に達した<sup>(4)</sup>。このうちの二世は2/3を占め、市民権をもつにもかかわらず、二重国籍ゆえに忠誠が疑われたのである。それでもアメリカへの忠誠を示すため、約4200人の二世はアメリカ軍としてヨーロッパ戦線で戦い、なかでも442部隊の活躍は戦後の日系人の地位向上に影響したと言われている。

ところが、アメリカに「忠誠をつくした」二世と異なり、日本に送られ教育を受けた後にアメリカに戻った帰米二世や、そのまま日本に定住した

二世(在日二世)たちの経験はあまり語られてこなかった。近年の日系アメリカ人研究では、「日本の軍国主義」に勝利した「アメリカの民主主義」という歴史的言説のなかで、二世や一世たちが行った帝国日本への支援が隠蔽され、アメリカへの「忠誠」と「貢献」を中心にした移民史が語られた結果、三世の「歴史的無意識」に疑問がなげかけられている(東 2014: 374)。

1943年、強制収容所で成人に対して行われた忠誠心の表明を公式に求める質問によって、日系人コミュニティは分断した。30余りの質問のうち二つが、アメリカへの忠誠心と軍隊への入隊意志を確認するものだった。二つの質問に「否」とこたえた二世たちは「ノーノー組」と言われた<sup>(5)</sup>。当局から反米や不忠誠組というレッテルが貼られたが、そこには二つの国に対して、100%の不忠誠でもなく100%の忠誠でもない複雑な思いがあった。

在米の「純二世」に対して「帰米二世」は「欠陥のある、または離脱した市民」と呼ばれた(野崎 2007: 60)。当時、帰米二世はアメリカ社会だけでなく日本からも危険視されたが、今では政府の言いなりにならず権力に抵抗した勇気あるアメリカ人と見られるようになった。時代によって、アイデンティティ・カテゴリーの意味あいも変化するのである。イチオカは、人種偏見のある社会において国家への忠誠とは何かを問い、アジア・太平洋戦争の激動期に日本やアジアに渡った二世たちの経験を日米の国境を超える視点で捉え直そうとした(Ichioka 1997)。これまで、第二次世界大戦で戦った二世兵士の英雄行為は賞賛されても、強制収容や兵役に抵抗したり、アメリカ市民権を放棄した人は不忠誠と見られてきたのである。しかし、そこには、戦争期の移り変わる情勢のなかで、二世たちが日本とアメリカの間で揺れ動き、相反する感情があることを捉える視点はなかった。彼・彼女たちのアイデンティティの矛盾は政治的コンフリクトの現われである。



## 世代ギャップとリーダーシップの移行

二世のなかには、親によって普通学校の他に放課後または土曜に日本語学校に通わされたものも少なくなかった。日本語の教材として修身が使われ、言語とともに儒教倫理に基づく価値観が教えられていた。この「日本精神」を教える教育がアメリカ市民としての教育と矛盾するとして、1921年には外国語学校を規制するカリフォルニア州法が制定された。その後は日本語を通じて「アメリカ化」を行うようになった。しかし一世にとっての「日本精神」とは、日本の軍国主義や右翼知識人たちが考えていた天皇制国家の指針となるものとは異なり、「古き時代の倫理を具体化したもの」であり、日系アメリカ人に通用すると考えていた(東 2014: 227)。しかし、一世の行うこの微妙な区別は二世には理解できず、混乱をもたらすこともあったようだ。たとえば、一世が望んだ二世のアメリカ化とは、皮肉にも「頑張る」「我慢する」「分をわかまえる」など、日系人価値観の強調だったのである(黒木 [1996]2014: 198)。ある二世女性は、親から「学校では一生懸命勉強し、先生や教会には逆らわないように、アメリカの友達や仕事仲間迷惑をかけないように」と教えられてきたが、今では何が日本の文化か本当はわからない、と語っている(黒木 [1996]2014: 198)。

第二次世界大戦は、忠誠、ナショナリズム、アイデンティティなど、それまで存在していた一世と二世の世代間ギャップをさらに拡大させた。そして多くの二世指導者たちは、自分たちの将来は自分の生まれたアメリカにあると確信したのである(イチオカ 2013: 244)。市民権をもち成人に達し始めた二世に、家族やコミュニティのリーダーシップが移るきっかけとなったのが強制収容であり、戦後の日系社会は一世の退場と二世の登場によって「日本人から日系への転換」が起こった(イチオカ 2013: 244)。

## 「アジア系アメリカ人」の誕生

「アジア系アメリカ」という汎エスニシティは、1960年代末、黒人解放運動とベトナム反戦運動というコンテクストのなかで誕生した政治的カテゴリーである。「アジア系アメリカ人政治同盟」を創設したイチオカによって考案されたと言われている。そこには、戦前、特に一世ナショナリズムが敵対していた他のアジア系の人たちと連帯することによって、統一的アイデンティティを採用する政治的、歴史的文脈があったのである(黒木2012: 167)。それまで使われていた「オリエンタル」という呼称を拒否し、70年代はじめから半ばにかけて「アジア系アメリカ人」が定着し、今に至っている。

抑留体験にもかかわらず、日系アメリカ人はいち早く戦後社会に復帰し、高い教育水準、低犯罪率、世帯所得中間値の高さ、白人との結婚率の高さなどによって、1960年代頃から「モデル・マイノリティ(模範的マイノリティ)」というステレオタイプが当てはめられた。初期は日系人に対して、のちにはアジア系全体に一般化されるようになった。しかし「ガラスの天井」というマイノリティの昇進を阻む見えない障壁が存在し、アジア系の実態を反映していない神話であるという批判がある。その一方で、「モデル・マイノリティ」という表象を勤勉への賞賛として受け入れるアジア系もいる。しかし問題は、それが実態を反映しているかどうかではなく、それが果たす役割である。

その役割とは、他のマイノリティの不満や怒りをそらすためにマジョリティにとっては都合のよいスケープゴートとして、また「やればできるマイノリティがいるから」今のシステムに問題はないと、利用されることである。では、アジア系アメリカ人が利用される危険性と回避には、何が必要なのだろうか。マツダは、「人種の中産階級」という用語を使って次のように述べている。この中間層が、「もし頑張れば白人になれる」と勘違

いするなら白人至上主義は補強されるが、中間層であることと人種の序列を拒否し、他のマイノリティコミュニティとの連帯を選ぶなら白人至上主義を解体することができるという(Matsuda 1996: 150)。

### 「アジア系アメリカ人」の変容

「アジア系アメリカ人」の誕生から約45年、そのカテゴリーに問題がないわけではない。アジア系アメリカ人を本質化する人種差別的言説と実践を補強する恐れ、政治的、人工的につくられたものなので「本当の」集団を代表していないこと、なによりもアジア系アメリカ人を一括りにできない多様性が増してきたからである(黒木 2012: 168)。特に1965年の移民法改正以降、中国系、フィリピン系の他にインド系、韓国系、ベトナム系など他のアジア地域からの移民が増加し、出自、言語、階級、宗教、歴史、文化などの上で超多様なカテゴリーになった。さらに、英語しか話せないアメリカ生まれの世代と英語を母語としないアジア生まれの新一世、そしてタイガー・ウッズのようなミックス・レースのアジア系がいる。<sup>(6)</sup>2000年の国勢調査によると、一つ以上の人種(ミックス・レース)のアジア系アメリカ人は13.9%を占める(Lai and Arguelles 2003: 2)。ただし、この割合は自己認定によるものなので、本人がどの出自にアイデンティティを置くかは、本人に聞くしかないのである。<sup>(7)</sup>

では、それぞれのエスニック・アメリカ人は、実際にどのようなアイデンティティを持っているのだろうか。21世紀はじめ、アメリカの5大都市に住む中国系、韓国系、ベトナム系、日系、フィリピン系、インド系、パキスタン系の7集団を対象にした広範な調査が行われた。これまでの調査と異なり、アメリカ生まれだけでなくアジア生まれのアジア系アメリカ人を対象にし、内部の差異を考慮したものである。その結果、3人のうち2人がエスニック・アメリカン(日系アメリカ人や中国系アメリカ人)を主要なアイデンティティとしているものの、5人のうち3人が「アジア系アメリカ

人」としても自己認識していた。つまり大半が、汎アジア系アメリカ人とエスニック・アイデンティティを状況に応じて使いわけていたのである (Lien et al. 2003)。

### アイデンティティの選択から政治へ

このように多様性が増している現在でも、アジア系アメリカ人というカテゴリーに意味はあるのだろうか。社会学者のエスピリツは、固定的で閉じられた単一のカテゴリーと分類される危険性はあるものの、過去だけでなく今日も残る反アジア感情や人種差別に対して、集団間の連帯という戦略的重要性がある、と論じている (Espiritu 1996)。例えば、日本製自動車がアメリカ市場で大きなシェアを占め日本パッシングが起こるなか、1982年にデトロイトの白人自動車工場労働者が失業への怒りから日本人と間違えて中国系青年を撲殺した事件、1992年ロスアンゼルスで韓国系の新一世に向かった黒人暴動など、反アジア感情、反移民感情の脅威がなくなったわけではない。したがって、アジア系アメリカ人というのは、選択的アイデンティティというよりも (Jeung 2005: 9)、エスニシティを超えて政治的に必要になるアイデンティティなのである。

エスニシティを超えた連帯が、必要な事例がもう一つある。1998年に成立した「市民的自由法(civil liberty act)」は、戦時中の抑留という不正義に対して政府に矯正と倍賞を求めて闘って18年目の成果である。この戦時中の強制収容体験について、それまで一世、二世の被抑留者から語られることはほとんどなかった。その沈黙が破られたのは、実態調査のため1980年「戦争中の市民の移転と抑留に関する委員会」が設置され、全米で開かれた公聴会への出席や証言によってであり、それらを見聞きするなかで過去と取り組むことができるようになった、という人は少なくない。

この市民的自由法は、1941年の真珠湾攻撃の後、日系アメリカ人が正当な手続きを経ずに強制収容所に送られたことに対して、政府が謝罪と補償

を行ったものである。一見すると日系人だけに関連するように見えるが、そうではない。法律の名称に日系アメリカ人という言葉が入っていないことからわかるように、特定の集団の利益に関するものではなく、「正当な手続きを補償する憲法修正第五条」に関するものである。政治的、経済的状况の変化によって、差異を超えたマイノリティの組織化は戦略的に不可欠となる。

したがって、2001年の9.11の同時多発テロ後、カリフォルニアの日系アメリカ人が、国内で高まる報復攻撃支持の中、イスラム系アメリカ人の人権侵害に対していち早く立ち上がり抗議したのは、憲法違反という法の支配に対する侵害を問うものだった(黒木 2012: 170)。立ち上がった日系人は、真珠湾攻撃後の社会的興奮と不正義の再来を、この時目にしたからである。戦時中の抑留という不正義は再び起こらないのだろうか。サンフランシスコで40年近く弁護士をしている日系三世のミナミは、政治的経済的状况によって起こるかもしれない、と現実的な意見を述べている(Minami 2008: 57)。

2000年の国勢調査によると、日系アメリカ人は、低い出生率と高い外婚率(非日系人との結婚)、約3割のミックス・レースの存在とその半数が戦後の移民が占めている、ということがわかった(Lai and Arguelles 2003: 74)。近年、日系アメリカ人の人種間結婚相手に変化が見られる。筆者が80年代初めに調査した頃は、日系三世、特に女性の結婚相手には白人が多く、ジェンダーの問題が指摘された(黒木 1986: 76)。しかし、80年代以降は他のアジア系との結婚が多数を占めている(Lai and Arguelles 2003: 77)。1980年代には日系社会が外婚やその子どもたちを受け入れるようになった。もはや日系美人コンテストの応募者が「純粋な」日系人である必要はないのである。

では、郊外の白人コミュニティに居住し、職場では白人の同僚をもち、非白人との結婚が増えるなか、中産階級のアメリカ人としてのアイデンティティ強化によって、日系アメリカ人のアイデンティティは今後どう変容するのだろうか。抑留経験が日系人としてのアイデンティティの土台と考える

老齡世代と「自分の父や祖父に起こったことは知っているが、その事に心を奪われることはない」三世以降の世代が増えている(トーピー 2013: 143)。たしかに日系アメリカ人として集団をつなぐ政治的、経済的要因は薄れつつあるが、「永遠のよそもの」「人種的周辺性」に変わりはなく、反アジア、黄禍論の再燃の危惧は残っている。<sup>(8)</sup>特に近年、メディアによる中国の経済的、軍事的脅威への煽動が、いつ他のアジア系へのバッシングやヘイトクライムに変貌するかわからない。先述したミナミも、中国が国際的にさらに大きな力をもてば、アジア系アメリカ人へのバックラッシュになることを危惧している(Minami 2003: 57)。なぜなら、デトロイト撲殺事件でわかるように、外からはアジア系内部の差異(どのエスニシティか)の区別はつかないし、またスケープゴートをつくる上で内部の差異は問われないからである。

## おわりに

日系アメリカ人は一世から三世まで、アメリカの人種主義によって「帰化不能外国人」「敵性外国人」そして「日系アメリカ人」というハイフン付きアイデンティティに見られる「永遠のよそもの」と位置づけられてきた。日系であれアジア系であれ、歴史的な文脈から切り離して、人種主義はエスニシティ、ジェンダー、階級などの集団内部の差異を不問して一律に扱う。その一方で、初期の一世指導者たちはアジア系をひとくくりにする白人の人種主義に対抗するために、他のアジア系また地方出身の日本人たちを差異化し、差別してきた。その背景には、白人中産階級の規範への文化変容モデルがあり、それは日系に限らず多くの移民集団の上層部に受け入れられた。多様な初期移民たちを結束させたのは、この規範モデルをもとにした日本とアメリカの人種主義への抵抗、協力、共謀、同化、譲歩だった。

そこでは、ジェンダー、階級、世代などの多様性は抑えられ、均質な日

系アメリカ人像がつくられた。純粋性の強調による抵抗運動は、分離支配に対抗するには有効だが、差異の境界を自然視し補強する。日本人かアメリカ人か、出稼ぎか定住か、市民か外国人か、忠誠か不忠誠か、日系かアジア系かなど偽りの二項対立図式によって、見えなくなる複合的マイノリティの存在と、それによって最終的に誰が(どの集団が)利するのか、注意しても注意しすぎることはないだろう。

### 引用文献

- 蘭信三, 2013, 「近現代日本と人の移動 概要」, 蘭信三ほか編著『人の移動事典 — 日本からアジアへ, アジアから日本へ』, 丸善出版。
- 東栄一郎, 2014, 飯野正子監訳『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで — 忘れられた記憶1868-1945』, 明石書店 [Azuma, 2005]。
- チャウ エスター・ナンリン, 1991, 「女性運動 — アジア系アメリカ女性はどこに?」『日米女性ジャーナル』No.10: 88-101 [Chow, 1989]。
- ゴルヴィツァー, ハイנטツ, 1999, 瀬野文教訳『黄禍論とは何か』, 草思社 [Gollwitzer, 1962]。
- イチオカ, ユウジ, 1992, 富田虎夫, 糸井輝子, 篠田左多江訳『一世 — 黎明期アメリカ移民の物語』, 刀根書房 [Ichioka, 1988]。
- , 2013, ゴードン・H・チャンほか訳『抑留まで — 戦間期の在米日系人』彩流社 [Ichioka, 2006]。
- 岩渕功一編著, 2014, 『〈ハーフ〉とは誰 — 人種混濁・メディア表象・交渉実践』, 青弓社。
- 川橋範子, 黒木雅子, 2004, 『混在するめぐみ — ポストコロナル時代の宗教とフェミニズム』, 人文書院。
- 黒木雅子, 1986, 「日米の文化比較からみる日系アメリカ人の性役割」『女性学年報』7: 73-82, 日本女性学研究会。
- , 1999, 「日系アメリカ人女性の自己再定義 — エスニシティ・ジェンダー・宗教の交錯」『社会学評論』50(1): 59-74。
- , 2007, 「ポストコロニアル」, 田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』, 世界思想社。
- , 2012, 「ジェンダー・エスニシティ・宗教との交渉 — 北米アジア系女性の複合的アイデンティティ」, 太田好信編著『政治的アイデンティティの人類学 — 21世紀の権力変容と民主化にむけて』, 昭和堂。
- , [1996] 2014, 改訂版『改訂版 異文化論への招待 — 〈違い〉とどう向き合うか』, 朱鷺書房。

- , 2014, 「ミクロネシアをめぐる人々の移動と日本の関与」『人間文化研究』32: 69-81。
- , 2016(近刊), 「『日系アメリカ人』の構築と変容 — エスニシティ・ジェンダー・国家の境界で」, 黒木雅子, 李恩子編著『「国家を超える」とは — エスニシティ・ジェンダー・宗教』, 新幹社。
- 野崎京子, 2007, 『強制収容とアイデンティティ・シフト — 日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』, 世界思想社。
- 塩出浩之, 2015, 『越境者の政治史 — アジア太平洋における日本人の移民と植民』, 名古屋大学出版会。
- トーパー, ジョン, 2008, 藤川隆男訳『パスポートの発明 — 監視・シティズンシップ・国家』, 法政大学出版局〔Torpey, 2000〕。
- , 2013, 藤川隆男・酒井一臣・津田博司訳『歴史的賠償と「記憶」の解剖 — ホロコースト・日系人強制収容・奴隷制・アパルトヘイト』, 法政大学出版局〔Torpey, 2000〕。
- 上野千鶴子, 1998, 『ナショナリズムとジェンダー』, 青土社
- Asian Women United of California, ed. 1989, *Making Waves: An Anthology of Writings by and about Asian American Women*, Boston: Beacon Press.
- Collins, Patricia Hill, 1991, *Black Feminist Thought: Knowledge Consciousness, and the Politics of Empowerment*, NY: Routledge.
- Espiritu, Yen Lee, 1996, “Crossroad and Possibilities: Asian American on the Eve of the Twenty-First Century,” *Amerasia Journal*, 22(2): vii-xii.
- Glenn, Evelyn Nakano, 1985, “Racial Ethnic Women’s Labor: The Intersection of Race, Gender and Class Oppression” *Review of Radical Political Economics*. Vol. 17(3): 86-108.
- Ichioka, Yuji, 1997, “Beyond National Boundaries: The Complexity of Japanese American History,” *Amerasia Journal*, 23(3): vii-xi.
- Jeung, Russel, 2005, *Faithful Generations: Race & New Asian American Churches*, NJ: Rutgers Univ. Press.
- Lai, E. and D. Arguelles, eds. 2003, *The New Face of Asian Pacific American: Numbers, Diversity & Change in the 21st Century*, San Francisco: Asian Week.
- Lien, Pei-te, M. Margaret Conway & Janelle Wong, 2003, “The Contours and Sources of Ethnic Identity Choices among Asian Americans,” *Social Science Quarterly* 84(2): 461-81.
- Mazumdar, Sucheta, 1989, “General Introduction: A Woman-Centered Perspective on Asian American History” ed. Asian Women United of California, *Making Waves: An Anthology of Writings by and about Asian*



- American Women*, Boston: Beacon Press.
- Matsuda, Mari J. 1996, *Where Is Your Body?: And Other Essays on Race and Gender and Law*. Boston: Beacon Press.
- Minami, Dale, 2008, "Asian American as a Movement" ed. Lee, Joann Faung Jean, *Asian Americans in the Twenty-First Century: Oral Histories of First- to Fourth-Generation Americans from China, Japan, India, Korea, the Philippines, Vietnam, and Laos*. NY: The New Press.
- Yano, Christine R. 2006, *Crowning the Nice Girl: Gender, Ethnicity, and Culture in Hawai'i's Cherry Blossom Festival*, Univ. of Hawai'i Press.

## 注

- (1) 「ミックス・レース」「ハーフ」「混血」などをめぐる人種混淆の言説と歴史的検証について、『〈ハーフ〉とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』岩淵功一編著、青弓社、2014を参照のこと。
- (2) 『日系アメリカ人』の構築と変容——エスニシティ・ジェンダー・国家の境界にて、黒木雅子・李恩子編著『「国家を超える」とは』、新幹社(近刊)を参照のこと。
- (3) 南進論については、拙稿「ミクロネシアをめぐる人々の移動と日本の関与」を参照。
- (4) 真珠湾攻撃で死亡したハワイの民間人約50人のうち、約20人が日系市民「アメリカ市民」であり、ハワイの日系人のうち約1800人が本国の収容所に送られた(塩出 2015: 318-99)。
- (5) 二世作家ジョン・オカダの『ノーノー・ボーイ』は、「ノーノー」とこたえて敵性外国人として二年間刑務所に入れられた二世の物語(1976)。
- (6) 1997年、プロゴルファーのタイガー・ウッズはアフリカ系アメリカ人と見られることに対して、「カプリネイジアン」宣言を行った。彼のもつ白人(Caucasian)、黒人(Black)、アメリカ先住民(Indian)、アジア系(Asian)という四つの出自を表すための造語。人種的割合としては、アジア系が多い彼は、アジア系アメリカ人の雑誌で最も影響を与えた人物として選ばれている。
- (7) アメリカ国勢調査における人種の分類は、1970年代以降、自己認定を採用した。エスニシティによる自己認定の一貫性については、拙著参照のこと(黒木 [1996]2014: 122)。
- (8) 黄禍論(yellow peril)とは、19世紀末~20世紀初めにかけて欧米で吹き荒れた、白人が想定する中国人と日本人への脅威のこと。カリフォルニアでは、大手メディアによる反日感情の煽動が見られた。半世紀以上前に書かれた『黄禍論とは何か』の「結語 その後の黄禍論」で、著者のゴルヴィツァーは、過去の出来事と見ないように注意を促している。

